Osaka University Knowledge Archive

Title	障害者労働をめぐる言説の分析
Author(s)	青木, 千帆子
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/2028
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【37】

氏　　名	青　木　千帆子（あおき　ちほこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学　位　記　番　号	第　２３５２７　号
学位授与年月日	平成22年３月23日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学　位　論　文　名	**障害者労働をめぐる言説の分析**
論文審査委員	（主査） 准教授　渥美　公秀 （副査） 教　授　堤　　修三　　教　授　近藤佐知彦

論　文　内　容　の　要　旨

障害者運動の歴史は、生産性によって存在の価値が決まるという今日の価値観に対し、働けない体から差別なく生きる資格を問うものである。この問いに対し、障害者労働がどのように語られるのかという観点から考察することで、問題の所在を整理し、自分なりの答えを出すことが本研究の目的である。

本研究においては、文献調査、フィールドワーク及びインタビュー調査を実施した。そして、障害者運動の歴史、及び障害者労働の実践の場にある語りを題材に分析することで、生産性という価値を揺さぶる、すなわち異化するとはどういうことかを考察する。

以上の課題を、本研究では次の構成に即して展開した。

第1章「障害者労働をめぐる言説」では、障害者労働に関するこれまでの議論を分野横断的に振り返る。そこには2つの問題が潜在する。一つは労働の場で求められる機能や能力と障害者の備える機能と能力の問題、もう一つは個人の生産性によって存在の価値を評価されることをどう捉えるのかという問題である。いずれの学問分

野においても双方の問題を同時に解決するだけの十分な議論が展開されているとはいえない。本研究では、障害者労働における問題を議論する言説として、生産性という価値に回収される言説と存在を評価する価値を異化しようとする言説、2つの方向性をもつ言説を区別して分析する。そして、障害者労働をめぐる言説に潜む問題点を明らかにする。

第2章「労働とは何か」では、障害当事者の間で「労働とは何か」という問題が、どのように議論されてきたのかを視点に文献を読み込む。ここでは、私たちが働くことに投影している生産性という価値を、否定することによって異化しようとする言説が、より承認されやすい生産性という価値に回収される言説へと移っていくプロセスを確認した。そして、価値を異化しようとする言説は様々な障壁の中、異化の陥穽へと落ち込んでいく。そこには、統合されうる主張をするならば生産性という価値に回収され、その一方で価値は揺るがず、敢えて異化しようとするならば排除に甘んじるしかないというジレンマがある。それは、障害当事者による努力のみで解決することが困難なジレンマであり、生産性によって存在の価値が判断されることを異化しようとする議論は、社会全体を巻き込んでの議論を切望していた。

1970年代、80年代に当事者によってなされた価値を異化しようとする取り組みは「自立」という言葉をキータームとしていた。第3章「『自立』の変遷」では、私たちが労働と同様に価値を見出すことが多い「自立」という概念に一旦注目を移し、その用法がどのように変遷してきたのかを古典・新聞記事・法令文を対象に確認した。ここでは「国」の「経済的自立」から「障害者」の「自立支援」へと用法が変化し、同時に「自立」は当事者の物語から支援者の物語へと様相が変化したことを確認した。そして、それらは生産性という価値に回収される言説に基づいて正当化されており、その背後には「労働→生産性→財＋意思決定＋存在価値→自立」という強固な図式が堅く守られていることが示された。それは、私たちの社会が経済成長の物語の中で、障害者自立生活運動のメッセージの根底にあった、生産性によって存在の価値を判断することに対する異議申し立てを放置したままにきたということである。

第4章「権力として立ち現れる『自立』」では、障害者自立支援法上「自立」しているとされる当事者たちのライフコースをたどった。ここでは、障害者を雇用する事業所でのフィールドワーク及び障害当事者へのインタビュー調査を題材にした。この結果見出されたものは、語られない「自立」と漠然とした不安である。「労働→生産性→財＋意思決定＋存在価値→自立」という強固な図式は、障害者を「今ここにある自立」ではなく「もっと良い自立」へと追い、同化&統合へと向かわせている。「自立」を生きる障害者の暮らしの実態は、生産性という価値に対する私たちのふるまいを、再検討する必要がある点を強く示唆する。

第5章「障害者労働の場にある交換とジレンマ」では、障害者を雇用し始めたばかりの事業所でのフィールドワークを題材に分析し、ここで労働の場を複数の交換システムが混在する場とする分析視点を導入した。生産性という価値に回収される言説は、労働を市場交換へと疎外し、価値を多元化することで異化しようとする言説は、労働に多様な交換を導入する。しかし、2つの言説は労働と福祉という異なる場で議論されるのみで調和しないため、現場には解決の困難なジレンマが生じる。この結論から導き出されることは、陥穽に陥っているのが必ずしも価値を異化しようと試みる障害者だけとは言えないという点である。社会の一方を市場交換、そしてもう一方を贈与と、あるいは一方を経済、もう一方を福祉と分離して考えてしまうこと、そのものが同化主義的社会に潜む陥穽であり、そこに陥り抜け出せなくなっているのは、健常者・障害者と区分される存在ではなく、私たちの社会全体そのものなのだ。

第6章「障害者労働の場にある規範」では、法定雇用率を達成し障害者を雇用する経験の長い事業所におけるフィールドワーク及びインタビュー調査を題材とする。そして、障害者がどのような価値規範によって判断されているのかを分析した。いずれの事業所においても、生産性は非常に重要な問題として扱われている。しかし、生産性を重視しながらも、その事業所における存在価値を判断することを一時的に保留するような「遊び」が存在する事業所があった。この「遊び」の存在は、市場交換を含む多様な交換を成立させ、様々な価値尺度で存在を承認する可能性を増やしている。

第7章「職場適応援助者の用いる戦略」では、職場適応援助者による障害者労働に関する語りを分析した。「労働の枠組みにおける遊びの不在」へ働きかけるための実践としては、就労支援技法を用いて生産性を求めるのと同時に、趣味、文化といった「きっかけ」を戦略的に用い、労働に「遊び」を導入するものであることが明らかになった。

終章「生産性という価値に対し、私たちはどうふるまうのか」では、以上の研究内容をもとに、働けない体から差別なく生きる資格を問う声に対する応答を検討する。本研究の調査研究を通して一貫して見出されるのは、生産性という価値に対し2つの方向をもつ言説――生産性という価値に回収される言説と存在を評価する価値を異化しようとする言説――の力関係である。そして、2つの言説はその異なりのままに統合されるべきであるということが、フィールドワークから見出される結論である。既存の労働概念、すなわち個人の生産性によって存在の価値を評価されることを疑い、その価値観を異化しようとする言説は、「労働→生産性→財＋意思決定＋存在価値→自立」という強固な図式の前に瓦解してきた。しかし、今日の労働の場に限って言えば、すでに統合された立場からそこにある価値観を異化しようとする試みが生じている。私たちは労働の場で、そこが生産の場だからこそ、もっと生産性ではない価値を語るべきだ。そして労働の側に市場交換される労働とは異なる形で踏み込んでいくことが、間接的ではあるが、働けない体から差別なく生きる資格を問う声に対する応答となる。

論文審査の結果の要旨

本研究は、今日の労働がなぜ障害者を排除するものであるかを問うと同時に、その労働に投影されている生産性という価値を揺さぶるとはどういうことかを考察するものである。

このため障害者労働がどのように論じられてきたのか、その歴史と現在とを知るために、文献調査、障害者労働の現場でのフィールドワーク及びインタビュー調査が行われている。

結果、労働が生産性という価値に一元化されて語られることが、障害者を排除する要因となっている点が指摘され、社会が経済と福祉に分離される陥穽に陥っていることが導き出されている。労働の場で、そこが生産の場だからこそ、生産性ではない価値を語るべきであり、労働の側に市場交換される労働とは異なる形で踏み込んでいくことが、働けない体から差別なく生きる資格を問う声に対する応答となる。これは、生産性によって存在の価値が決まるという現代社会に通底する価値観に対し、働けない体から差別なく生きる資格を問うた障害者自立生活運動の歴史に対する応答と位置づけられる。

障害者の労働をめぐる議論は、これまで支援者側からの観点に基づいた調査研究や実践報告、実践のための実用書の類が多くを占め、本論文のように障害当事者側の観点に基づき考察したものはまだ少ない。とりわけ知的障害者は、障害学と呼ばれる分野においてもその議論の対象として包摂されてこなかったともいえる。これに対し本論文では、長期にわたるフィールドワークを元に知的障害者の視点を導入することに成功しており、その欠を補う上で注目される。

また本論文は、複数の研究方法論を往還し、これまでのフィールドと研究活動そのものを対象化し捉えなおしていこうとするものである。もとより、異なる原理と方法論に依拠しつつフィールドでの経験を記録する以上、そのプロセスにおいて概念のあいまいさや混乱が生じているが、こうした努力の上に単に流行にとらわれることのない、理論に裏付けられた研究法とその成果が樹立できたとも考えられる。このような努力の結果として、現代社会に通底する「労働」「生産性」という広大なテーマに対して、著者独自の見解を提起した点でも興味深く、博士号授与に値すると評価しうる。